

末黒野

すぐろの

2月号 (通巻762号)



木犀の闇

小川玉泉

雲ゆきて雲を迎ふる今日の月
一列に足らふ稲架立ち町の小田
隠沼の水面にひびき鴉の声
木犀のひそめる闇の深さかな

大井川またぐ木橋の秋惜しむ
茶畑へ散り込む桜紅葉かな
水澄みて石みな丸き大井川
堰落ちて泡立つ水のすぐ澄めり
白じろと泡生む礁鳥渡る
舞殿の鳳風の額秋寂びぬ
くろがねの天水桶や紅葉映ゆ
ハイウエイを離れては即く十三夜

冬
耕

松本三千夫

蓬萊てふ賃取橋の秋気かな
秋日濃し極彩色の勅使門
海近く住み海を見ず風鶴忌
基地の灯を見降ろすホテル冬北斗
一人来て流離ごころや枯野道
姫娑羅の白き冬芽や雲寄せず
わが凭れる一冬木より野の展け
碧落の冬薔薇の赤諾へり
石路の花墓苑の燈を明るうす
綱引く漁婦大根引きて農婦たり
冬耕の鍬の高さを日の沈む
推敲の欲しき一字や翁の忌

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

金平糖

小野口正江

未枯の中の明日葉青きかな
隣人も窓開けてをり十三夜
羅漢像へ影を十月桜かな
立冬の夕日捉へてむかご落つ
手にあそぶ金平糖や酉の市
父の忌や父の山なる蜜柑山
白陀師の嘆きを今に波郷師忌
声出して祖父呼ぶ孫や紅葉山
遠慮がちに柚子を賜ひぬ一葉忌
木の葉髪攪む湯殿の手摺かな

冬ざくら

清海信子

初鴨に沼の景色の生れけり
筑波嶺に雲の天蓋草の絮
文化の日六十路の吾子のフラメンコ
雁の列大きメニューを閉づるとき
神苑の気位といふ女郎花
駅長といへど一人や草紅葉
指で梳く蓬髪葛の原に佇ち
冬ざくら仰ぎて空の蒼さいふ
浜に出て小春の砂の踏みごこち
枯れし花なほ崩れずに藤袴



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

十三夜

岡田史女

流水を晒して秋の大井川
折り返す蓬萊橋や花芒
秋濁の川瀬を鷺の歩むなり
黒潮の海を眼下や鳥渡る
神廟の燈のけはしや櫛紅葉
夫に買ふ駿河の酒や十三夜
形見なる蔵書賜へり石路の花

コスモス

小倉正穂

晴天の軒より低く秋の蝶
斉唱のさやけき空へ吸はれゆく
強がりの姿勢くづるる虫の夜
コスモスや海より深き子の眠り
爽やかや庁舎に高く日章旗
晩年はその日任せよ穂絮飛ぶ
亡き母の分まで熟柿啜りけり



小春風

乙坂きみ子

日向ぼこ

菅野蒔子

軒に吊る葉草からび後の月
多摩川の中州広がり冬に入る
漁りの舟出払へり石路日和
波音の波におくる小春風
岬果ての無人灯台枯尾花
菩提寺に入る綿虫の舞の中
散策の歩を休めては冬紅葉

通草の実

菅野日出子

十三夜

木下和代

穂芒や流れの細る大井川
豆柿を活けて川越札場宿
添水鳴る渡し場宿の力蕎麦
色変へぬ松や渡ししの悲話残り
山里の媼に乞ひし通草の実
天水の菊の御紋や木の実落つ
山巔に迫る茶畑鳥渡る

穂を解きて夕日の色の花芒
思ひ出でぬ一事を胸に猫じゃらし
雨あとの露草色を尽しけり
直角に生け垣刈られ神の留守
飽くる事なく生きて居り十三夜
鎌倉に抜くる尾根道落葉急
水音も包み込みたる紅葉山

万 仞 集

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|--|---|--|---|---|--|
| 刈 入 れ の 写 真 添 へ ら れ 今 年 米 | 小 さ き 音 空 に か へ し て 木 の 実 落 つ | 草 紅 葉 卒 寿 の 姉 に 歩 を 合 は す | 家 康 の 手 形 に 触 る る 秋 思 か な | 床 の 間 の 軸 は 好 日 と ろ ろ 汁 | 山 里 や 点 描 の ご と 柿 灯 る | 暮 れ 初 め し 草 原 渡 る 鹿 の 声 | 一 竿 の 雁 ゆ く や 夕 茜 | 練 兵 の 匍 匐 の 記 憶 穴 惑 ひ | 呼 子 笛 花 野 の 天 へ 吹 く 教 師 |
| 八 城 洋 子 | 大 川 暉 美 | 嵐 弥 生 | 岡 本 ヨ シ エ | 宮 島 ム ツ | 河 合 と き | 原 和 三 | 千 葉 惠 美 子 | 小 林 一 榮 | 秋 山 悌 歩 |

| | |
|----------------|-------|
| 梵鐘の余韻につるべ落しかな | 内山タエ |
| 多羅葉の便り秋日に透かし読む | 外山生子 |
| 畳屋の間口全開今朝の冬 | 松尾京子 |
| 心の荷何もなき日や照紅葉 | 占部美弥子 |
| 教会の午後の静けさ蔦紅葉 | 小山直子 |
| 川下り時に緩やか初紅葉 | 久保田優子 |
| 唐松の落葉時雨や遠浅間 | 渡辺崖花 |
| 庭石を覆ひ下枝の薄紅葉 | 小山ほ子 |
| 小鳥来る水琴窟の杓の柄に | 福田禎子 |
| これ何と度たび母や返り花 | 鈴木礼子 |

巨林抄

老いの糸共に紡ぎて暮の秋
秋気澄む墨痕著き朱印帳
逢魔が時柘榴裂けたる道急ぐ
手の中に息をまるめて落葉焚
庭園はビルの屋上小鳥来る
背のびして賽銭投ぐる七五三
秋蝶の風と消えゆく暮色かな
傘寿経て栗の渋剥く妻の指
冬紅葉会釈してゆく車椅子
引き摺りし跡くつきりと千歳飴
弁天の琵琶鳴りさうな小春かな
厄除け札張りてみかんの無人売り

藤田千枝子
古川敦子
村田慶子
鈴木俊孝
神谷さうび
内田 梢
清水元子
宮地静雄
百瀬真山
荒木千秋
山口郁子
鈴木一恵